

ジュリア・セラーノ著／矢部文訳（サウザンブックス社、2023年）

ウィッピング・ガール トランスの女性はなぜ叩かれるのか

山田 秀頌*

目下吹き荒れているトランスジェンダーに対する嫌悪感情は、反動的な政治勢力と結びつくことで、女性とマイノリティの権利取り消しを正当化するために大規模に動員され始めている。本書の翻訳出版は、日本においてもトランスフォビアが激化する中、2022年にクラウドファンディングで企画され、目標を上回る270万円超という成果をあげたことで実現した。評者も微力ながら推薦メッセージを送り、支援した一人だが、トランスをめぐる状況がいつそう悪化していく世界情勢において、本書が読まれる必要はより高まっている¹。

著者のジュリア・セラーノは、トランス・アクティヴィズムとフェミニズムに関する代表的な論客の一人であり、本書だけでなく、*Excluded: Making Feminist and Queer Movements More Inclusive* (2013)をはじめ複数の著作をもつ。著者はオンライン上でも活発に発言するアクティヴィストであり、あらゆる論争的な主題について、問題を整理しつつ独自の視点から切り込んでいくスタイルで、自身のウェブサイト上にて数多くのエッセイを公表している。2007年に原書が出版された『ウィッピング・ガール』は、2024年には第三版も刊行され、著者の代表作であると同時にトランス・フェミニズムの主要著作の一つとみなされている。

本書は全20章にわたり、自身もトランスの女性である著者の経験が前面に押し出されている。「はじめに」で著者がいうように、トランスが自身の経験について書く場合、それは自伝であることが多い(27頁)。他方、専門家がトランスを研究対象として書く場合——その「専門家」は医者、心理学者、人類学者、社会学者、フェミニズム／ティア理論家であったりするのだが——そこでは往々にして、日常に根差したトランスの経験や視点は

消去されることになる。著者は、自身の経験に大きく依拠しながらも、経験をフェミニスト的な分析に接続する。それによって、「専門家」が流通させる一面的な理解(第七章・第九章)や、メディアによるセンセーショナルな描写(第二章)が、いかに偏ったものであるかをあばくのだ。

『ウィッピング・ガール』がトランス・フェミニズムの著作として位置づけられるのは、本書がなした理論的な貢献が大きい。レスリー・ファインバーグやケイト・ボーンスタインのような論客がトランスの抑圧の根源を性別二元論に見定めて以来、トランス・アクティヴィズムの目標は「ジェンダー二元制をぶち壊す」(36頁)ことだという考えが主流になった。本書はこの考えを相対化する。著者の分析によれば、自身のようなトランスの女性——女性としてのアイデンティティをもち、女性として生活する女性、あるいはそれを目指す女性——が、にもかかわらず様々な場面で差別に直面しうるのは、「ただ単に二元制的ジェンダー規範に沿った生き方をしていないから」というより、「女である」から、そして「女性性を表現しているから」である(267頁)。そして、トランスの女性が女性である／女性的であるために被る蔑視や排除を一般的なトランスフォビアから区別して、ミソジニーとして位置づける。ただし、トランスの女性が経験するミソジニーには、トランスが特に被害を受けるものもある。例えば、女性性はもとより人工的だとみなされているが、トランスの女性性はトランスであるという理由で殊更にニセモノであると軽蔑され、「ハイパーフェミニン化」される(42頁・70頁)。そこで、トランスであることと交差して働くミソジニーを、著者は「トランス・ミソジニー」と呼ぶ(41頁)。このような、トランスの女性が経験する差別を女性差別として問題化する姿勢こそ、『ウィッピング・ガール』

* 東京大学非常勤講師

ル』をトランス・フェミニズムの著作たらしめているものだ。

本書によるもう一つの理論的な貢献は、トランスに対する差別的な構造、枠組みや価値観を問うための用語としてシス概念を位置づけたことにある。伝統的に、「トランスでない人」を指示する言葉としては、生物学的な、遺伝的な、普通の、本物の、といった形容詞が用いられてきた。こうした「トランスでない人」を「標準」として位置づける用語に代えて「シス」を使うことで、トランスでない人々を優遇する社会をトランスの側から捉え返すことが可能になった。著者の「シスセクシズム」もまた、そうした捉え返しのための概念である(38頁)。本書は、いかに著者自身を含むトランスの女性の正当性が、トランスであることと、女性である／女性的であることの両方の理由で切り下げられていくのかを説明するために、独自の分析概念を次々と創出する。そのすべてをここで紹介することは到底できないが、一つを挙げるとすれば、第八章で詳述される「シスセクシュアル特権」だろう。最終章にあたる第二十章では、本書の結論として、トランス・アクティヴィズムとフェミニズムは「あらゆる形式の〈ジェンダー特権〉に注視し、挑みかかるべき」という見解が示される(386頁)。生まれつきの女性あるいは男性であるために、「誰が女で誰が男か正確に判断する能力と権限が自分にはある」(195頁)のだという特権意識は、そうした〈ジェンダー特権〉の一つであるに違いない。

本書が考案した「トランス・ミソジニー」の概念や、トランスの抑圧を分析する道具としての「シス」の位置付けは、その後のトランス研究にとって欠かせないものとなり、最近も注目すべき成果が生み出されている。前者の例としては、Jules Gill-Peterson, *A Short History of Trans Misogyny* (Verso, 2024) が、後者の例としては Emma Heaney ed., *Feminism against Cisness* (Duke UP, 2024) が挙げられる。

著者はフェミニンであることに誇りをもっており、フェミニズムは女性性をエンパワーすべき

で、「人為的産物」やパフォーマンスの地位に追いやるべきではないと主張する(第十九章)。生物学者である彼女は、女性性は単に「構築」されて押し付けられるものではない、と主張するにとどまらず、私たちには女性性や男性性へ向かう「内在的傾向」があって、それは脳にハードワイヤーされている(潜在意識下で自身のセックスの本来の在り方を理解している)と示唆する(第五章・第六章)。これは本質主義だろうか? ジェンダー研究者は、トランスを「ジェンダーの社会構築」の最良の例かのように想像する傾向にある。だが単純な社会構築の概念は、例えば出生時に男性の性別を割り当てられた人が「社会化の圧力の下で男性になる」ことは説明できても、「社会化の圧力があるにもかかわらず、女性になる」ことは説明できない。後者の主体化を説明するためには、社会化の圧力に抵抗する心理学的な領域が必要になる。著者によるジェンダー・アイデンティティ概念の分析(105頁以下)は、社会構築主義的なトランスの理解において切り落とされてきた、ジェンダー越境的な同一化における無意識の動因を再評価しようという試みとして理解できる。だが、その動因を脳に還元するのは、フェミニスト理論としては安易な道だろう。

著者による多岐にわたる批判は有用である反面、批判対象と同じくらいの単純化を免れていないのは気がかりだ。また、サンフランシスコのクィア／トランスコミュニティに根差す著者の問題意識には、アメリカ固有の文脈ではないかと思われる部分もある。おそらく読者の多くは、時に熱心にうなずきつつ、時に首を傾げて異論を言いたくなる気持ちに駆られるのではないか。だが、そうした読まれ方こそがフェミニズムの著作にはふさわしい。

注

1 評者による推薦メッセージは以下。

<https://greenfunding.jp/thousandsofbooks/projects/5658/activities/21568>